

2025年度健育会グループ新入職員中途研修を実施しました

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



2月26日(木)に、健育会本部と、KANDA SQUARE ROOMにて、新入職員中途研修を開催しました。理事長講話と研修を実施し、健育会グループへの理解を深めてもらいました。

今回の研修は、例年どおり病院部門と介護部門の2つのグループに分かれて執り行われました。

まず、健育会グループを紹介するためのオリエンテーションとして、創立70周年の記念ビデオを放映いたしました。その後、私より「健育会グループのMVV、職員の皆さんが理解すること」と題した講話を行いました。研修の締めくくりには、株式会社ビーフォーシーの相部博子先生をお招きし、「Our Team 心を豊かにする病院と介護施設」というテーマで講義をしていただきました。

私が理事長講話でお話しした内容をご紹介します。

今回の研修は、「健育会グループは何を考え、どこへ向かおうとしているのか」ということを理解していただくことが目的です。

皆さんはすでに医療人としてのスキルや経験があるかと思いますが、健育会グループの一員として求められることは他のグループとは異なる部分が多く存在します。

本日の研修で、健育会グループの理念をしっかりと理解して頂きたいと思います。



健育会グループは今年創立73周年を迎えました。30数年前、先代から理事長職を引き継ぐ際、私は「組織は何のために存在するのか」ということを深く考えました。

当時、日本の医療は財政を国に任せながらも、多くの公立病院には多額の補助金が投入されている状況でした。ちょうどその頃、ソ連で国家財政の崩壊が起きました。国が崩壊すれば、全てのインフラが停止します。ゴミは収集されず、蛇口をひねっても水が出ることはありません。もちろん、医療機関も閉鎖を余儀なくされます。そのような状況で、真っ先に被害を受けるのは、治療や介護を必要とする弱い立場の人々です。

ソ連の崩壊を目の当たりにした私は、「このままでは日本もいつか医療が崩壊する」という切実な危機感を持ちました。

そして、国の補償に頼り切るのではなく、自分たちの力で効率的かつ質の高い医療を提供し続けることこそが私の使命である、と確信しました。

そこで私は、健育会グループの「ミッション」に「光り輝く民間病院グループ」というテーマを掲げました。



介護施設を設立する際にも、私は「何を目的にし、どのような社会貢献を果たすべきか」を深く考え、その答えとして「活力のある高齢社会のサステナビリティを実現する」という使命を掲げました。

日本では年間約89万人の方が医療機関で亡くなられています。その一方で、約47万人もの方々が誰にも看取られることなく、孤独死を迎えられているという厳しい現状があります。

この日本という国に生まれながら、お一人で人生の終焉を迎えてしまうことは、あまりにも悲しいことです。

私は、こうした「看取り手のない方」をゼロにする為に、高齢化社会であっても活力を失わず、最期まで人間としての尊厳を持ち続けていただけるような仕組みを作り、その持続可能性を追求することが、私たちの果たすべき使命だと考えました。

また、介護のために若い世代が仕事を諦めざるを得ないような状況も、決してあってはなりません。介護は私たち「プロ」に任せていただき、ご家族に代わって、高齢者の方々が毎日を生き生きと過ごせる環境を整える。それもまた、健育会グループが担うべき大切な使命のひとつだと考えています。



健育会グループは、「民間」ならではの力を何よりも大切にしています。既存の枠組みに縛られることなく、自由な発想と果敢な行動力を活かした経営は、これからさらに厳しさを増す医療・介護の現場において、不可欠なものになるでしょう。

私が理事長に就任して以来徹底してきた、工夫を凝らした効率的で質の高い医療への取り組みは、昨年、日本経済新聞のコラム「Deep Insight」でも取り上げられました。

健育会グループが掲げる「光り輝く民間病院グループ」は、世の中や患者さんの変化に素早く対応していく「スピード」と、新しいアイデアに対して即座に行動する「チャレンジ精神」を何よりも重んじています。

そして、そうした新たな取り組みに対する責任の所在も明確にしています。

多くの公的な施設では、責任の所在が曖昧であったり、前例のないことに対して拒否感を抱いたりすることが少なくありません。

しかし私は、皆さんが挑戦する全ての取り組みに対して、自らが責任を取る覚悟を持っています。

私はレベル3以上のインシデントについては、24時間以内に全て把握するようにしています。これは万が一問題が起きたとき、皆さんを全力で守るために行っていることです。

私が必ず責任を取ります。皆さんは臆することなく、新しいことにどんどんチャレンジしてください。

民間の医療と公立の医療、その姿勢の差が鮮明に表れた事例をご紹介します。

今から15年前、東日本大震災によって、健育会グループの石巻港湾病院（現：石巻健育会病院）は甚大な津波被害を受けました。

海に近い立地であったため、日頃から徹底した避難訓練を行っていたことが功を奏し、地震直後も素早く患者さんを3階以上のフロアへ避難させることができました。その結果、津波による犠牲者を一人も出すことはありませんでした。

しかし、想定を遥かに超える津波の爪痕は深く、電気、ガス、水道といったあらゆるインフラが遮断されました。

職員たちは極限の状態でも懸命に患者さんのケアに尽くしましたが、国からの支援も届かず、外部との連絡もままならないような先行きが見えない中で、「このまま患者さんと共に凍死してしまうのではないか」という恐怖を感じたといいます。



被災から3日目、石巻の職員がどうにか本部との連絡を取り付け、救援部隊と共に物資を病院へ運び込むことに成功しました。

それからは、健育会グループ職員が一丸となり、毎日のように物資を送り続けました。

これらの支援は私からの指示ではなく、全て職員自らの意志によるものでした。

医師、看護師、ケアワーカー、セラピスト……。職種の垣根を越え、全職員が石巻港湾病院の仲間と患者さんのために、率先して動いてくれたのです。

その結果、石巻港湾病院はわずか半年という短期間で、通常の診療ができる状態まで復旧を果たしました。まだガスが通らない中であっても、施設をオール電化へ切り替えるなどの工夫で困難を乗り越えたのです。

一方で、患者さんや職員の心には「また同じような津波が来るのではないか」という不安が残りました。

そこで健育会グループは、津波の心配がない高台に「石巻健育会病院」として新たに設立することを決断しました。

このスピード感とチャレンジ精神、そして職員たちの強固なチームワークがあったからこそ、私たちは震災の悲劇を乗り越えることができたのです。

その一方で、同じく被災した石巻市立病院が取った選択は、病院の閉鎖でした。

公的な支援を受けていたにもかかわらず、震災後わずか3日で復旧を断念したのです。患者さんは自衛隊のヘリコプターで移送され、誰もいなくなった病院を、医師や看護師たちは歩いて去っていきました。

この石巻港湾病院と石巻市立病院の復旧に向けた姿勢の差は、当時『医療タイムス』でも大きく取り上げられました。

東日本大震災における、いわき湯本病院の復旧についても触れておきたいと思います。

いわき湯本病院は内陸に位置していたため、直接的な津波の被害は免れました。しかし、原子力発電所の事故に伴う風評被害により、街から人影が消え、国からの給水車までもが来なくなってしまったのです。

そこで私たちは、健育会グループ独自の人脈を最大限に駆使し、静岡県から15トンもの水を積んだ給水車を確保し、病院へと届けました。ここでも、民間ならではのネットワークと、決して諦めない心が困難を打ち破る原動力となりました。



また、民間病院の真髄である「チャレンジ精神」を体現しているのが、西伊豆健育会病院の例です。

かつての西伊豆地区は、病院への搬送中に出血多量で亡くなってしまいう患者さんが少なくないという、深刻な課題を抱えていました。地域から「救急病院を作ってほしい」という切実な要請を受けた私は、地域に望まれる医療こそが何より必要だと感じ、当時60床の小さな救急病院を設立しました。開設以来、私たちは「絶対に救急を断らない」という誓いを立て、今なおその使命を果たし続けています。

過疎地域の救急医療において、当直医の専門や肩書きは関係ありません。「目の前の患者さんを救う」ことが何よりも最優先です。

もちろん、病院の近隣に住む医師やコメディカルスタッフたちが、オンコールで即座に駆けつけてくれる「Our Team」の固い絆があるからこそ、こうした受け入れが可能になっています。

このような柔軟な対応ができるのも、民間病院だからこそです。多くの公的病院では、「医師が専門外の治療を行い、万が一訴えられたら困る」という理由で受け入れを拒否するケースも散見されます。しかし健育会グループでは、先ほど申し上げた通り、全ての責任を理事長である私が引き受けるという姿勢を貫いています。だからこそ、西伊豆健育会病院は開院から30年以上にわたり、一貫して救急を断らない病院であり続けられるのです。

さらにコロナ禍においても、健育会グループはスピード感と社会貢献への使命感を持ち、大きな挑戦に踏み切りました。当時、回復期リハビリテーション施設であった石川島記念病院を、新型コロナウイルス専門病院へと転換させたのです。この前例のない取り組みは、ニュース番組『報道ステーション』でも大きく取り上げられました。



ここで健育会グループの「ミッション」「ビジョン」「バリュー」についてお話をさせていただきます。

健育会グループの「ミッション」である「光り輝く民間病院グループ」としての活動は、国の財政に依存し、柔軟な対応が難しい公的病院に対し、「チャレンジ精神」と「スピード」という民間の強みによって大きな力を発揮してきました。

社会情勢も、目の前の一人の患者さんの状態も、刻一刻と変化していきます。その変化に即座に応じられるスピード感を常に持ち、「これをすれば課題を打破できる」と感じたことがあれば、迷わず上司に報告し、すぐに行動に移せるチャレンジ精神を持ってください。全ての責任は私が取ります。皆さんは、果敢に挑戦し続けてください。

「ビジョン」には「クライアントの心を豊かにする病院・施設」を掲げています。

経営資源や地域の特性によって、それぞれの施設に求められる役割は異なります。まずは自らが所属する「病院・施設理念」をしっかりと胸に刻み、周囲の仲間たちと絶えず語り合うことを心がけてください。個々の「病院・施設理念」が実現に近づくことこそが、グループ全体の「ビジョン」を形作っていきます。

公立病院に勤める私の知人の医師は、「日々真剣に取り組んでいるのに経営が赤字のままだ」と嘆いていました。その大きな原因は、職員一人ひとりの目指す方向がバラバラになっている点にあると私は感じています。どれほど個々が全力を尽くしていても、目標へのベクトルが分散してしまえば、組織は迷走してしまいます。皆さんの力がひとつの目標に向かって結集したとき、初めて「効率的で質の高い病院経営」が実現します。理念を理解し、一丸となって突き進む。その過程で日常的な意見交換を重ね、さらに理念をブラッシュアップしていくことが理想的です。

「バリュー」では、個々のクライアントに提供すべき価値について提言しています。クライアントが求めるものは、一人ひとり異なります。それぞれがどのような価値を求めているのかを深く理解し、それに応え切るための努力を続けていってください。

真に質の高い病院・施設とは、「チーム医療」が確立されている場所を指します。

「医療」「介護」「生活活性化」「ホスピタリティ」……患者さんやご利用者が求めているものは、千差万別です。

一人ひとりの情報をチーム全体で密に共有し、その方に最適化されたケアを提供することが求められます。職種の垣根を超え、足りない部分は互いに補い合い、全員参加で臨むこと。それこそが私たちの目指すチーム医療です。



私は、医療・介護は「究極のサービス業」であると考えています。

医師であれば、きちんと患者さんの目を見て、信頼に応えられる言葉をかけているか。看護師は、ナースコールの先で優しい声を出し、安心感を与えられているか。セラピストは、その高い専門性を惜しみなく提供できているか。自分自身の専門職としてのスキルを磨くと同時に、接客として求められる振る舞いを常に忘れないでください。

自分は健育会グループのチームの一員であるという自覚を持ち、自身の役割を理解した上で業務に取り組んでいってください。

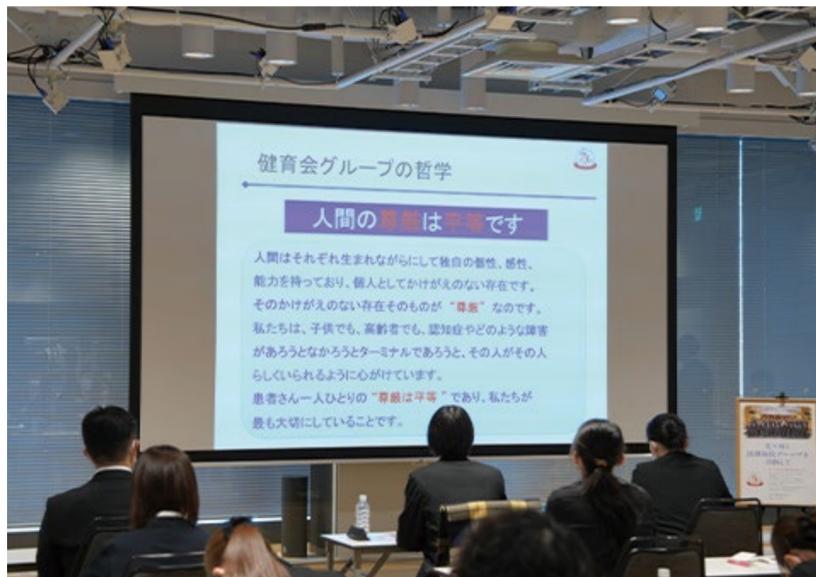
その積み重ねが健育会グループの「ミッション」「ビジョン」「バリュー」へと繋がっていきます。

健育会グループでは、3年前より「全員参加型のOur Team経営」を目標に掲げています。

「Our Team経営」には、「安全」「確固たる経営」「愛情を持って親身な対応」の3つの要素が存在します。患者さんやご利用者に対し、「安全」な医療を提供することを大前提とし、その中で「確固たる経営」を行います。

職員全員が、自らもグループの経営に携わっているのだという自覚を持って行動することが求められます。そうした「確固たる経営」を行うことで、皆さんの心には、ゆとりが生まれます。「愛情を持って親身な対応」は、皆さんの心にゆとりがあってこそ、初めて実現できるものです。患者さんやご利用者に幸せホルモンを生み出してもらい、自身の治癒力を高めてもらうような医療・介護ケアを目指してください。

そして、「人間の尊厳は平等である」という、医療人としての哲学をしっかりと理解してください。



人間は、誰もが生まれながらにして独自の個性や感性、能力を備えた、かけがえのない存在です。

子どもであっても、高齢者であっても、あるいは障害があっても。その人がその人らしくいられるよう、常に一人ひとりの尊厳を等しく敬う心を持って接してください。

私たち健育会グループは、治療のみならず、介護も担っています。

「口から食べる、尿意・便意を自覚する、立位・歩行ができる」。患者さんやご利用者が、これらの動作を自立して行うことが困難になったとき、どのようにすれば再び以前のような姿を取り戻せるのか。その方法を、職員一人ひとりが自分のこととして深く考え、話し合い、Our Teamで取り組むようにしてください。

私は、全ての患者さん、ご利用者の方に、最期まで一人の人間としての尊厳を尊重されたまま、人生を全うしていただきたいと考えています。

命の灯火が消えかける瞬間は、いつか必ず訪れます。その時、ご本人の尊厳を守るための措置を行うのか、それとも延命措置を優先するのか、私たちは重大な判断を迫られることになります。

その時が来た際に、どのような選択をすべきか判断できるよう、日頃からご本人やご家族と真摯に向き合い、心を通わせ合えるような深い関係を築いていってほしいと願っています。



最後に、私が皆さんに約束することを3つお伝えします。

1つ目は、「仕事のやりがい」を実感できる組織づくりです。皆さんが日々注いでくれる努力が、正当に評価される人事制度をしっかりと整えます。

2つ目は、「一人ひとりの人生の夢」を抱ける職場環境の実現です。やりがいのある仕事を通じて心にゆとりを持ち、さらにその先にある自己実現や成長を願えるような、豊かな環境を作ることを約束します。

そして3つ目は、勉強会や報奨制度を提供し「医療・介護に携わるものとしての使命感」を育てます。

私は、健育会グループが進むべき道を「Show The Flag」として、これからも皆さんに示し続けます。そして、皆さんが安心して様々なことにチャレンジできるよう、いかなる場合においても、全ての責任は理事長である私が取ります。

皆さんと共に「Our Team」で「光り輝く民間病院グループ」としての使命を全うできることを強く願っています。

その後行われた、ビーフォーシーの相部博子先生による講義では、チーム力を活性化し、生産性を引き出す情報共有の方法や、クライアントの心を豊かにする接遇について、ディスカッションも交えて学んでもらいました。

講義の前に、相部博子先生からお話がありました。



私はこれまで、数多くの企業や病院のリーダーにお会いしてきましたが、竹川理事長ほど揺るぎない信念を持ち、それを実行に移されている方はなかなかいらっしゃいません。

竹川理事長が「全ての責任は理事長である私が取る」と断言されるのは、ひとえに皆さんの情熱を深く信頼しているからです。

皆さんは、今日のお話を表面的な言葉だけで受け取るのではなく、その奥にある真意をしっかりと心に刻み、自らの力に変えていただきたいと思います。



日々の仕事の一つひとつが「光り輝く民間病院グループ」へと繋がっているという意識をしっかりと持ち、「人間の尊厳は平等である」ということを常に胸に抱いて、様々なことにチャレンジしてくれることを心から期待しています。